

かつての出雲街道沿いに、江戸時代からの面影を残す一軒の古民家がある。11代当主の佐々木彬夫さんはそこでさまざまなイベントを企画しながら新しい古民家の利活用を目指しているという。古民家の良さだけにとらわれない佐々木さんの挑戦に迫った。

歴史や風情を 現代に伝える場所

去る12月25日、町役場で佐々木家住宅（舟場）の国登録有形文化財登録証の受け渡しが行われた。国の文化審議会が同家を国登録有形文化財にするよう文部科学省に答申を行ってから約5カ月。ちょうど良いクリスマスプレゼントになった格好だ。

佐々木家住宅は、江戸時代後期に庄屋の住居として建てられた主屋をはじめ、新座敷、穀蔵、新蔵が現存。主屋では、床の間の意匠や差鴨居などに江戸時代の面影を残しているほか、居室に畳を敷きやすいように大黒柱の中心を土間側に移動させた「逃げ」など、当時の技法を現代に伝えている。

古民家の魅力にふれた 少年時代

そんな佐々木家住宅の11代当主が佐々木彬夫さんだ。はじめに、佐々木さんが古民家の利活用を目指すようになったきっかけを聞いてみた。

「この家との出会いは子どものころ。生まれは東京だったのですが、当時はまだ戦時中でした。疎開で父親の実家のあった日野町に来たのがきっかけです」

佐々木さんは、昭和19年生まれ。幼少期を疎開先である日野町で過ごし、小学生にあがる時に一旦東京に戻ったものの、再び中学生の時に根雨中学校（当時）に転入。根雨高校にも約2年在籍し、およそ10年間を日野町で過ごしている。

「中学・高校時代に経験した、農業体験や山でのまき集め。そうした山村での生活の楽しさが今につながっているのかも」

仲間との出会いが 古民家活用のきっかけに

では、実際に活用を始めたきっかけは何だったのだろうか。

「平成19年から4年間勤務した山陰歴史館での経験がまず第一のきっかけになりましたね。もともと歴史や地理民俗学に興味があったのですが、同館への勤務でもっと興味が湧きまして…」

そこで得た知識などが、今の古民家活用に大いに役立っていると感ずます」

また、佐々木家住宅を活動拠点の一つにしている奥日野ガイド倶楽部との関係にも触れておきたいところだ。

「何かしないといけないなと思っていたところに、ちょうど出会ったのが、田貝英雄さんや杉原幹雄さんらでした。自分が抱いていた思いとタイミングよく合致したんですね」

その出会いが平成24年9月の奥日野ガイド倶楽部設立へとつながっていく。2番目のきっかけともいえるガイド倶楽部の設立を機に、佐々木家住宅も古民家「沙々樹」として、さまざまな活動の拠点となっていく。

ここでしか味わえないものを。 体験型の古民家として

古民家「沙々樹」の特筆すべき点は、やはり築180年以上経過しながら今もなお良好な状況を保っていることだろう。その利点を生かし、佐々木さんはワークショップやコンサートなどを開くなど、体験型の古民家として活用している。また、日野町と東京都杉並区の小学生とのオシドリを通じた交流でも、小学生の宿泊先や田舎体験の場所として、20年以上親しまれている。

「昔の建物の良さを活用すること一番に考えましたね。古民家コンサートは10回を数えましたし、囲炉裏端で聞く民話の会や古民家塾の開

催、代々家に伝わるひな人形や天神さまを展示するイベントも好評でした。また、最近では、新座敷に使われている欄間の作者・富次精斎をテーマにした寺社見学も企画しました」

そう話す佐々木さんから垣間見えるのは、「ここでしか味わえないものを発信したい」との思いだ。

「建物だけだと、一回で終わりですよ。イベントをベースにして建物も一緒に見せよう。そうすることで、古民家も生きてくると思っています」

古きを知り新しきを創る 挑戦の先にある未来

古民家を核に、一つのテーマに食や文化、暮らしなどを付加価値として付け足していく。そこにはさまざまな発見や楽しさがミックスされ、訪れた人がさらに日野町に興味を持つきっかけづくりになっているのではないだろうか。

「幅広い古民家の利活用を目指したいですね。いろんなジャンルの文化を発信していきたい。今後は、部屋の広さを利用した大人数での百人一首の大会や、古民家体験ができる宿泊施設の充実を目指していきたいですね」

積み重ねた歴史を大事にしながら、常に新たなアイデアを出し挑戦する姿勢が重要だと改めて実感させられた。国登録有形文化財として迎えた2018年。今年も佐々木さんの挑戦として活躍に期待したい。



古民家コンサートなどのイベントを開けば多くの参加者が。ひな人形の展示では町広報紙の表紙を飾ったことも。また、オシドリ天使（東京都杉並区の小学生）と地域との交流拠点としても親しまれている

